

神の恵みを歪曲する人間の罪

使徒パウロにとって福音とは徹頭徹尾「恵みの福音」であった。即ち、人が神の前に義とされるのは、いかなる意味でも人間の努力（律法を守ること）によってではなく、ただキリストの十字架による罪の贖いを信じる信仰による、という“恵み”の福音であった。しかしこの福音は、モーセの律法を何よりも大切なものと考え、それを遵守することを生活と宗教の絶対的条件と考えていたユダヤ主義者たちにとって誤解され受け取られた。

もしパウロが教えるように、人間の救われる（神の前に義とされる）のはただ恵みによるとすれば、また人間の不義によって神の義が明らかにされ人間の罪の増し加わるところ神の恵みもいよいよ鮮やかに現されるとすればそれでは、どうして神はなおも人間の不義と罪を裁かれるのか。

また人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、ただ信仰によると言っても、律法を守る必要はないかのように主張することは、無律法主義を助長するような教えではないか、道徳的にしまりのない、いいかげんな人間を作ることになるではないか。パウロが言うように、人間の不真実によって神の真実が明らかになり、人間の罪によって神の恵みがいつそう現れるとすれば、「善が生じるために悪をしよう」と言う、そういう人間を作り出してしまわないか——これがユダヤ主義者からパウロに投げかけられた反論であった（5～8節）。

福音に対するこの皮肉まじりの反論をパウロは激しい口調で断罪する。そのような主張は神の恵みの歪曲であり、罪を罪とも思わない人間の不遜であり、神を神として恐れない人間の傲慢以外のなにものでもない。そのような考えに対しては神の罰があるのみであると断ずるのである（5：8）。

しかし考えてみると、このユダヤ主義者のパウロに対する反論は、キリストの十字架の福音を安易に受け止めがちなキリスト者に対する厳しい批判のように思われる。どうせ許されるんだから、これぐらいのことはいいではないかと思ってふしだらな生活を続け、みんなやっているではないか、誰も見ていないではないか、小さいことではないかと考えて、悪いことを平気でしてしまう。そういういいかげんな生き方を私たちはしてはいないか。

どうせ良い薬が手に入るから、少々病気になっても大丈夫とばかり、医者注意をものともせず平気で悪いことをする人がいるとすれば、それは本当に愚かな人である。どうせ「ごめんなさい」と悔い改めれば許してもらえるのであるから、これぐらいのことは平気だ、と思って神の御前にふしだらな生活を続けるとするならば、それはキリストの恵みの大変な歪曲であり、神の恵みへの冒瀆以外のなにものでもないであろう。

私たちは「安価な恵み」ではなく、十字架という「高価な恵み」によって贖い取られたことをひとときも忘れてはならない。安価な恵みからは、しまりのない、いいかげんな生活が生まれ、高価な恵みからは、神の栄光のために生きようとする感謝の生活が生まれてくる。「（あなた方は）知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい」と別の個所でパウロは言う通りである（第1コリント6：19～20）。